

筏を組んで河を下ったが、増水で流され全員戦死した。

フィリピン人の案内でジャングルを行くのであるが、待ち伏せしている敵に皆やられ、戦死した戦友を背負って引き返してことが何回もある。またこの島は原始林が多く、大木は四層くらい上から根が広がっており、その下で皆が寝たこともある。また自分の腕よりも太い籐の蔓を番刀で切って、汁を飲んだこともある。また二層以上もある大蛇もトカゲも何回見たことか。

このような情けない生き地獄の山中で、通信隊の交信によって、四年兵に満期命令が出たことを知った。本当に夢のようである。中隊長は泣きながら言った。「この困っている最中に君たちが帰ったらどうするのか。一番頼りにしているのに俺の手足をとられたのと同じだ。帰っても直ぐまた来てくれ」

その後、戦況は逆転していき、あのレイテ島も玉砕し、また比島全域も敵に奪還されたのである。

最後に何時までも忘れられないのは、殺さねば殺されるのが戦争であるということである。また何人かの最後の水も与えたが息の絶える時、本当の最後は「お母さん」

と行って皆死んでいったことである。

私の弟はあのレイテ島のオルモックにて玉砕した。また末の弟は神戸の須磨区の三菱造船所でB 29の爆撃で爆死したのである。おそらく最後は「お母さん」と叫んで死んでいったことと信じます。何時までも戦争のない、平和な世界が続きますようお祈りいたします。

南方戦線

福島県 上神谷 林 太

チモール島ラウテン港の戦闘

昭和十八年十二月七日、スンバ島に向かうため乗船、ラウテン港沖に停泊中敵機二機来襲、銃撃を受け爆弾が中ほどと船尾に二発命中、船火事となり海に飛び込んだが工兵隊と思われる舟艇に助けられて上陸することが出来た。第二中隊伊藤三男軍曹の引率の下に、連隊本部ジャワ島スラバヤに進出したのは、十九年一月十七日ごろで第二中隊瀧口班に配属となる。その後七月二十八日ゴク

テーク列車転覆事故後、第一中隊に転属を命ぜられる。

ミヨヂットの戦闘

ミヨヂット東方バンブライの第一中隊山口小隊は薄暮に乗り、陣地構築中の敵に白兵突入し、敵を撃退するも山口小隊長以下三人戦死。

その後永井軍曹と軽機一、兵五人くらいで、ある一角を守備していたが優勢な敵が攻撃してきたので応戦するも、ついに陣地保持は困難となり、ミヨヂットを撤退す。

モモークの戦闘

ミヨヂット守備隊は、敵の包囲攻撃を受け、ついにバーモに転進と決定、第一中隊北村隊長はモモークに転進した。当日は北村隊長を先頭に浦野軍曹ほか十数人で行進中、ジャングル中わずか二〇分くらいの位置から自動小銃で突如乱射され、敵味方ともに手榴弾戦となった。敵は多勢で滅茶苦茶に投げ、私どもの身辺は誰がどうしているかさえわからない状態だった。この戦闘で佐藤重雄軍曹、松浦市治兵長が戦死した。このときは各人二、三発しか手榴弾を持っていなかったので全部を投げ、北村隊長以下と浦野分隊長以下数人の二組に分かれて敵から離脱し

た。撤退中、原住民に見つかったが、敵の話しが聞こえる地点を通って道を横断し、民家から一〇〇分位離れたジャングルに潜入した。

私どもは敵の追撃の目をくらし、飲まず食わずの状態、ジャングルに潜み、湿地を越え、バーモの前面の草原まで、やっとの思いでたどり着いた。しかしバーモに入るには包囲している敵陣をもう一度突破しなければならぬ。ところが前方の高台から猛烈な射撃を受けた。

そこで夕闇が迫るのを待って闇に乗じて高台に向かつて各個前進し、バーモにいた日本兵の台言葉をついに合流した。

私より先にバーモに到着していたのは北村隊長(負傷)および五十川少尉、長尾一延、佐藤一夫殿でした。県庁台で北村隊長に会って初めて自分が生きていたことを実感した。モモークより一週間もかかったので腹は本当にへっていた。飲んだのは水筒の水だけだった。

悪戦苦闘した多くの友はジャングルの露と消え、行動をともした佐藤伍長、松浦ほか二人も戦死した。

バーモ脱出決行(搜索第二連隊戦史より抜筆)

第一中隊北村大尉は、工兵一分隊を指揮して第一次攻撃部隊となる（私は攻撃隊の一員）。第一次攻撃隊突破作戦は、既に敵の重圍下にあること長く、しかも敵兵力は極めて多く、当初の作戦計画の支那人部落陣地の敵を攻撃し堤防上の敵トーチカを爆砕して、血路を開くという作戦遂行は困難となった。そこで止むを得ず敵の死角となっていたイラワジ河に沿って砂原を前進し、敵陣地の斜面突破をはかることになった。

十四日二十二時に攻撃を開始したものの、敵の火力攻撃は猛烈を極め、前進は遅延、敵陣地側面に進出したのが十五日三時ごろ、そして砂原の終点に到着した。

崖上には敵の火点あり、これをどうしても奪取せざるを得ず、当時の兵力わずかに五人ぐらいだったが、所有全火力をあげて制圧、次々に追及してきた中隊の全兵力で死闘の後、敵陣の一角を確保したのが五時半ごろ。たまたま崖上より透かして見下ろすと、支隊は砂原に集結しており、これでは支隊はイラワジ河に飛び込むか全域と判断、北村隊が敵のトーチカに突撃と同時に、一刻も早く崖上に突撃するしかない。そのころ、ようやく夜明

けとなり、敵は我が軍の企図を知り猛烈な砲火を浴びせてくる。この時天裕の濃霧が立ち込め、第一次の成功となったのである。

全ての火力で崖上の敵を制圧す

第一中隊高木軍曹は次のように書いている。突撃を前にして、佐藤仲分隊（軽機）、高橋茂夫分隊の擲弾筒その射手・上神谷、小銃手・細川、五十嵐、石川等の所有全火力を使って敵を制圧した。

その後工兵隊の敵陣爆破が断行された。それは本当に突然ダダダと、今までのあらゆる砲爆撃の音とはまた別な、それらの音に勝るとも劣らぬ轟音とともに「ぐらっ」と地軸もゆらぐ物凄い音だった。そして爆破に成功した工兵隊の二人が背を低くして戻って来た。

明号作戦

未知の戦場へと急行し二月二十四日、ブノンペンに到着した。各中隊は二月三日、相前後して転進を開始したが、輸送集結は困難を極め部隊がブノンペン北方二〇キロのサウドン付近の露宮地に集結し終わったのは明号作戦開始二日前の三月八日二十二時であった。第一中隊北村

隊はスクン急襲後、主力は道路の南に広がる樹林を潜行し、小貴隊の右翼を超越して、保安隊所在方向に突進し、兵営まで一五〇呎の地点で機関銃小隊に、主力の突進援護を命じ、一挙保安隊を占領した。明号作戦は最後の戦闘となった。

諺に、国のためには血を流し、人のためには涙を流せ、自分のためには汗を流せ、といっていますが、私は戦闘にまた斤候に多数参加しましたが運がよいというか、幾度か死線を越えて、幸いにも命永らえることができました。戦後四十数年の生活の中で苦しい時には軍隊を思い出し、頑張ってきました。永らえた命を大切にして余生を出来る限り永く過したいと思う今日このごろです。

私の従軍記

新潟県 中村 倉一郎

私は支那事変、大東亜戦争と二回の大戦に参加し、武運強く生き長らえ、現在に至っている。

昭和十四年六月六日臨時召集、仙台野砲第二連隊留守隊に応召（第一補充兵）一二〇人は直ちに北支に出発、担帖（タンク）、天津、石家荘、山西省大原に到着、第二師団第二架橋材料中隊石田（三）部隊に入隊、第二小隊第三分隊一五班に配属された。

乗馬訓練、車馬の訓練など特訓を受け、作戦のため大原駅より乗車、奥地の侯馬鎮駅に下車、隊形を整え、大行山脈に向かう。

北支最大の高山、大行山脈は三三〇〇呎、七月でも肌寒い。強風時は黄塵万丈飛散し、防塵眼鏡やマスクが必要であった。

部隊は山脈の中に入る。一五〇呎もの架橋の輸送行軍で、急坂は山砲隊の二頭立ての馬で引き上げる。下り坂は車輪を桁にロープで結び付けて人馬もろとも滑り下ります。一步間違えれば千尋の谷である。

やがて川沿いに行軍し小高い安全地帯に宿営する。夕方から雨となる。宿舎は民家で雨は次第に激しさを加え、雷雨、風雨が強くなった。

山脈は草木はなく禿の岩山である。山は大荒れとなっ